新企画 ザ・ミュージック・ピープル第1回

人気プライバシーがなくなるなら人気はいらない——天野

雑沓する上野駅15番ホーム。東北本線12時3分発秋田行きL特急〈つばさ3号〉の到着を待つ乗客の列の中に、N・S・Pのリーダー天野滋(26)がいた。ブルーのジーンズに黄色いTシャツ、サングラス姿ではあるが、昨夜、東京・厚生年金ホールのコンサート会場で見た、澄んだ目は変わりなかった。

彼の前を何人かの若い女性が通過する。誰一人、天野に気付く者はいない。やや遅れて列車に乗り込んだ中村貴之(26)、平賀和人(25)もファンの〝洗礼〟を受けることはなかった。

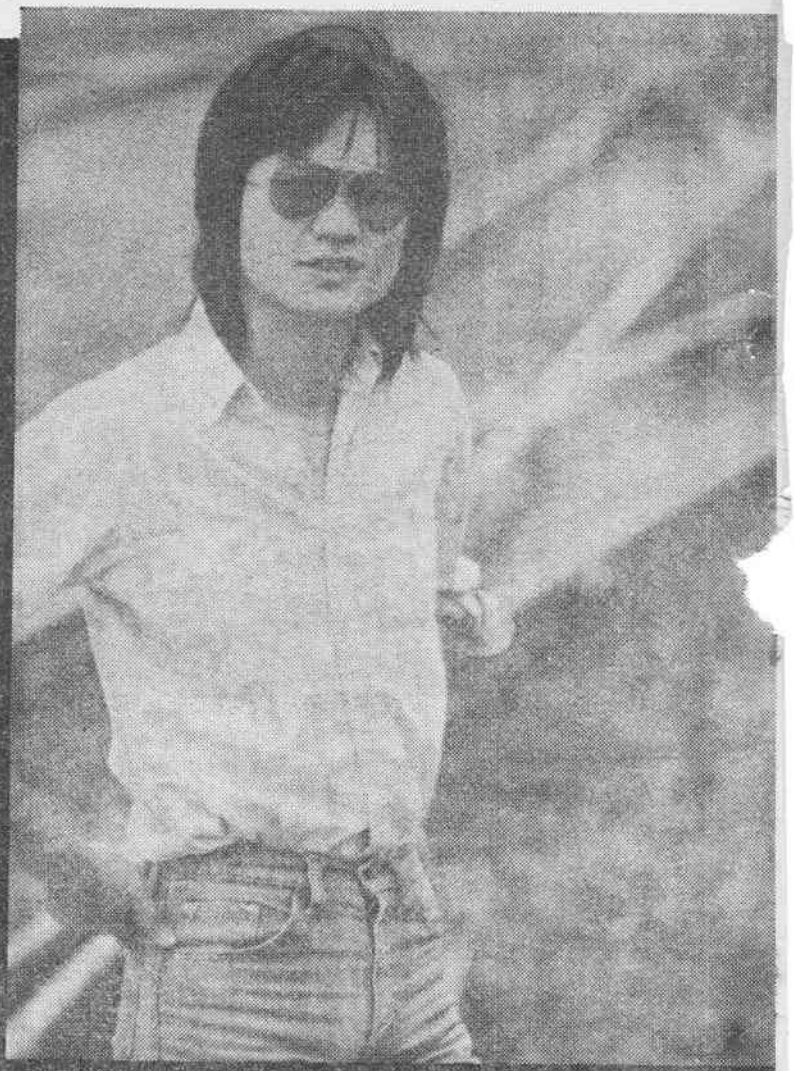
郡山コンサートへの異様に静かな旅立ちだった。

●N・S・Pデータ　'73年『NSPI』発表・21万3千

我々は今、音楽記事の洪水の中にいる。しかし、そのうちのいくつが、ミュージシャンの生の生活、本音、赤裸々な悩みにまで肉迫していただろうか？さらに、とりあげ方についても、安易な誤解がなかったとはいえない。言うまでもなくテレビ、マスコミに登場する回数が人気のバロメーターではない。日本のミュージック・シーンを真実作っている者は誰なのか！？　それを探っていくこともこの新企画の狙いのひとつである。N・S・P。見かけこそ地味ながら、総売上げ200万という驚異的な実績をもつ謎のグループ。第一回目にふさわしいミュージック・ピープルである。

青春に踏みとどまる持続のエネルギー

N.S.



枚、『NSPⅡ』17万5千、『Ⅲ』22万6千500、『おいろなおし』14万5千、『2年目の扉』12万6千、『ライブ』20万7千、『シャッのほころび』18万7千500、『明日によせて』15万、『黄昏に背を向けて』14万2千500、『八月の空へ翔べ』14万2千、『ベストアルバム』18万1千、'79年5月発表『風の旋律』でアルバム総売上げ200万枚を突破した。シングルはデビュー曲『さようなら』から、21日発売『青い涙の味がする』まで16枚に及ぶ。

「N・S・Pがアリスより下なのはわかるけど好きなの。ヒット曲のないのがビッグでない最大の理由でしょうね。ヒットを出してもらいたいけど、それ以上にN・S・Pの親しみやすい人間性を知って欲しい」(21才・学生・OL、ファン歴3年・静岡)

200万枚の実績を持ちながら、アリスなどメジャーとは知名度が格段に低いN・S・P。彼らはどういう認識なのか？

天野「N・S・Pの名前が一般的でないのは事実。でも名前を

「ヴチらはいつもくっついてる。ちょっと異常かな」チームワークのよさはバツグンの3人だ

ジ上にいる。そんな身近かな存在なのだろう。それが地味さになっているのではないか」

N・S・Pを発見したヤマハの合歓の里支配人・塩路氏はこう証言する。

「当時の彼らはアカ抜けしない若者だった。大人になっても変わっていないんだと思う。彼らがアリスになることはないだろう。天野クンは冒険者ではないし」

そして天野は、スタートからしてスターになる気は毛頭なかったという。

新修国語漢和辞典 第2版
宇野哲人編●780円
集英社

プロ就職に失敗！ぼくたちはプロになった——中村

N・S・Pの3人は全員岩手県の出身。文化果つる県といわれるが、彼らがN・S・Pを結成した一関市は県の玄関口であり、学生の街だった。彼ら3人は国立一関工業高等専門学校で初めて顔を合わせる。

中1まで東京で過し、母と別れて祖父母宅に身を寄せる天野。花巻育ちの平賀。宮古の近郊に生まれ肉親が大阪に転居した中村。3人共に一種の〝1人暮らし〟だった。

●N・S・Pデータ　高2の高専祭で先輩に誘われ、3人共にエレキバンドに加入演奏。解散後、天野と平賀は街のエレキバンドに参加。中村は『赤い鳥』風のフォーク・グループを結成。2人の女子高生の1人が、現平賀夫人の洋子さん。

2年ほどの活動のうち、まず中村のグループが女子高生たちの卒業で解散(高専は5年)。ほぼ同時期に天野・平賀たちの〝サディスティック・ピンク〟も分散した。

当時、中村は市内でフォークの団体を組織しており、コンサートを企画していた。このコンサートに出るために急ぎ組まれたのがN・S・Pだった。

旧名をニュー・サディスティック・ピンク。呼びにくいのかファンがN・S・Pと略称するので、高専4年のとき改めた。

結成当初、天野はフォークをいも扱いしていた。従ってフォークとロックを半々に演奏したものだ。吉田拓郎らのコピーでスタート、後、天野がオリジナルを作るようになった。第5回ポプコン入賞作『汗』は、天野に内緒で中村と平賀が応募した。

「N・S・Pの歌は田舎の味。いつまでたっても都会的になれないみたい。でも都会的な音楽がありすぎるから、N・S・Pみたいなのがあってもいい」(17才・女子高2年、ファン歴3年・東京)

岩手県大会で入賞、東北大会で優秀曲賞、本選でも入賞したN・S・Pにレコード化の話が2、3持ち込まれた。

天野「プロになる気はなかったけど、自主制作したいと思っていたので録音したんです。その時に新作『さようなら』を記念にテープに録らしてもらったら、それがデビュー盤になった」

平賀「3人とも就職するつもりで天野君はトリオ、中村君は高千穂交易、ぼくは日本楽器を受けたんです。全員が失敗でした。1人でも合格していたらN・S・Pはなかったと思う」

中村「就職に失敗して身の振り売る気はない。顔を知られて騒がれる存在に魅力はあるが、プライバシーが失われる。その意味では今の状態は住み心地がいい」

中村「電車に乗っても騒がれないのは一向に気にならない。自分の生活を無くしたくない。ぼくらは楽しんでやりたいんだ」

平賀「ぼくたちにスター要素があるとは思わない。客席にいてもおかしくない人間が、ステー

方を決めかねてた時に、ヤマハから契約の話がきました。とりあえず1年やってみようとプロになったんです」

デビューから6年、N・S・Pを手がけてきたキャニオンの渡辺有三ディレクターの証言。

「最初の印税は8万円と思ったら80万だったんでびっくり」天野

「ぼく一人で喫茶店に入れないんです」顔に似ず？シャイな平賀

「この世界に積極的だったのは、ぼくだけだったかもしれない」中村

作品 "青春…" 和感なし——妻子がいても違——平賀

「N・S・Pはキャニオンのニューミュージックの底辺を支えてくれたグループだ。東北人特有のネバリ強さと結束力が魅力だ。特にリーダー天野君の作品へのこだわりは純粋そのもの」

N・S・Pの音楽は、ひと言でいえば〈青春〉への一途なこだわりである。

「N・S・Pの詩が私たちの共感を呼ぶの。青春のひとコマひとコマを切り取った詩なんです。あの時あすればよかった、こうすればよかった……。誰でもが体験する青春の幼いゆえの後悔が、どの歌にもこめられているんです」（18才・定時制高女子、ファン歴2年・福島）

デビュー作『さようなら』から最新作『青い涙の味がする』まで、ためらい、悲しみ、歓喜し、燃え、消え、去っていった青春を、まるで谷内六郎の絵のようにペインティングした言葉たちが躍っているのだ。

26才、大半を作曲し、99%の作詩をこなす天野を除いて、中村と平賀には妻も子供もいる。むろん26才が、妻子のあることが青春ではないというつもりはない。

しかし、一貫して青春への挽歌を叙情に託すN・S・Pのしたたかさは何なのだろう。

●N・S・Pデータ　レコード化された作品約150曲のうち、青春をモチーフとしない作品はない。また作品で目立つのは、夕暮れから夜にかけて、秋から冬にかけてのイメージ。小説でいえば〝私小説〟の世界である。

N・S・Pの詩に洪水のようにあふれる独自の季節感は、天野の作詩がそうした時間帯、季節に行われることによる。

冬に夏の詩は書けないというわけである。実生活そのままを、彼は詩に置きかえるのだ。そして、モチーフもまた彼の体験を磨かれたことばでなぞったものなのである。

天野「作られたロマンの世界を聞くのは好きだが、自分で歌う気にはならない。自分の体験を芯にして表現するのはそのためなんです。古い曲で、今歌うと恥かしくなるのもあるが、作った時はそう思っていたのだから仕方ないと思う」

中村「天野クンの詩の世界にぼくは傾倒してるんです。誰でもだがN・S・Pは変わることなく〝青春〟に立ち止まったままだ。ナゼ、前に歩もうとしないのか。

「アリスのように、派手な曲をやって欲しいわ。でも、N・S・Pってメッセージ・ソングや経験する青春の断面だし、ぼくも同じような体験があり、ギャップはありませんね」

平賀「彼の詩に抵抗はない。天野クンの生活が丸見えで、あ、これはあの時のだなとわかる。まもなく26才。いつまでも青春でもあるまい、という声も聞くけど、結婚してても青春だと思うし、その考えはずっと変わらない」

週1回ライブ番組の司会をしているラジオ福島のアナ、深沢彩子さんの証言。

「天野さんの詩は、女の子の気持がよく描かれていて人気があります。ファンレターを見るとN・S・Pの曲を経て『私の青春は終わった』というものもありますね。女の子はN・S・Pの歌を卒業して女性になっていくみたい」

青春 激しい恋だった。結婚したいと真剣に思った——天野

プロテスト・ソングは似合わないのよね。それは彼らが岩手県出身者だからかも。どうしたってツッパリよりはいもだちが似合うんだし。それがまたいいんだけど」（20才・女子大生、ファン歴5年・郡山）

青春に踏みとどまる持続のエネルギー《N.S.P》

N・S・Pが、というより天野が〝青春〟を描き続ける理由は、彼の原体験が強烈だったからだ。

天野は一関で生まれ、東京で中1まで生活した後、両親の別離によって再び一関に戻った。祖父母宅での母と別れての生活である。

祖父母とはいえ、多感な少年にとっては孤独な毎日だった。

天野少年は好んで小説を読んだ。

高専に入って、ある女子高生と恋におちる。熱愛だった。

「初めての体験だし、すごく真剣だった。結婚しようと思った。しかし、彼女は高校を出ると東京の短大に進んだんです。遠く離れてしまえば……結局さようならをしました」

今は尾をひいてはいない。しかし、何かの時にフッと思い出す。天野の内攻性は一層強まった。

彼女との様々の思い出が、詩となってほとばしった。こうして自分の部屋で、天野は〝青春〟を量産していった。

●N・S・Pデータ　〝青春〟を看板にレコード、コンサート中心の活動が軌道に乗ったのは丙年から。コンサート3カ月、オフ3カ月のローテイションも確立する。収入は年俸制でプロ野球選手のように、昨年の成績で評価される。印税は作者に。昨年度の収入、3人共に1千万円を超す。

そうした体験があるからか、天野は自分の〝城〟を愛する。

現在、東京・祐天寺の2LDKのマンション住い。

「旅行やコンサートに出ると、無性に帰りたくなる。一人になるのが好きなんです。でも今の住いは広すぎるので引っ越そうと思うんです。もっと狭い所に移るつもりなんです」

金はあった方がいいが、金のために仕事をする気にはならないのだ。だから天野の金銭感覚は〝成りあがり〟矢沢永吉のそれと違う。コンサート・ツアーに同行するバック・バンドのメンバーの証言。

「レコードが売れて、コンサートにくるファンが増し、それに付随して収入もふえるならいいという考え方ですね」

目標　レコードが1位になること　1位を持続すること―天野

■6年間のうちには、やめようと思ったことも？

天野「最初の1～2年はいつも考えていた。年内200本近いコンサートで、ただ与えられた仕事を消化するだけだったからね」

平賀「ヒットを出さないとダメだと思い『夕暮れ時はさびしそう』の時は一生懸命だった。そしてヒットしたので自分たちのペースがとれるようになった」

■3年目ぐらいからプロにめざめたということか？

天野「そうだ。春と秋のコンサート・ツアーも確立させた。最近のレコードは『やった！』という感触がありますよ」

中村「その頃から天野クンのリーダーも板についてきたんです。彼は性格的にノラないとダメな所があったんだけどね」

■一人だけ独身の理由は？

天野「めんどくさそうだし、グループをやっているうちは結婚はないと思うな。それとタイミングもあるかもしれませんね」

中村「彼は早く結婚しないタイプじゃないかな。妥協しない人だし、自由に生きた方が才能も発揮できると思う」

■ビッグになれると考えてる？

中村「今でも大きいと思ってるよ。更に大きくなるためにはシングル・ヒットが必要だと思います」

天野「どの曲もヒットするように作っているんです。でも、当たらない。本当に水ものですね」

■6年で12枚のアルバム。年2作は多い方だと思うが。

天野「1年に1枚しかできないという人がいるがウソですよ。やる気なら3カ月で出来ます」

■N・S・Pは3人が作家でもある。分裂の可能性をはらんでいないか？

平賀「つき合いが音楽ではなくて友だちだし、曲も同じ傾向が好きだ。自分たちからこわすことはないと思う」

■いつも平均した打率は残すが派手さのないのが弱点では？

中村「6年間たしかに平均点で、その間に突然ビッグになっていく人間もいた。でも1発2発が上位になっても消える。永続きしてるのが最終的にはビッグになってるようですよ」

■当面の目標は？

天野「金でも人気でもなく、レコードが1位になること。これしかありません。そして1位になったら持続させること。『青い涙――』は久しぶりにアタリがいいので期待してるんです」

平賀「発売の21日には、ぼくの2人目の子供が生まれたし……きっといい結果になるよ。子供は男で〝青〟と名付けようかなんて冗談もでてるんです」

■奥さんたちはN・S・Pのファン？

平賀「岸田智史がぼくたちより好きといいながらも、やはりひまがあると

ファンは断然若い女の子。サインもらって〝私の宝もの！〟

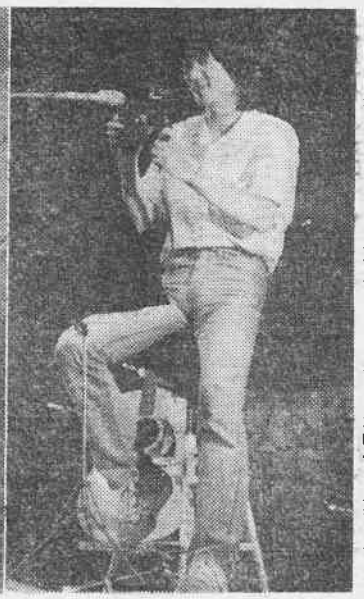
N・S・Pを聞いてるようです。

中村夫人・真弓さんの証言。

「N・S・Pは幼なじみが大人になったという感じです。私は静かにおちついて聞くのが好き。反面、地味な印象を与えるようですが、いつまでも息長く歌い続けて欲しいと思っています」

2人目の子供も生まれてステージに意欲的な平賀

「奥さんは女房というより同棲してる感じ」中村も1児のパパ



シングルヒットを狙うN・S・Pサウンドの生みの親は天野だ

公演 ぼくらの音楽を聞いて心なごんで欲しい——天野

郡山市民会館でのN・S・Pコンサート。一見して中学生とわかる女の子、高校生、OLたちが千900余の客席を埋めた。

N・S・Pは前夜の厚生年金ホールとまったく同じ構成・演出でこなしていく。

歌の合い間に話す、天野の喋りも同じだ。その内容も〝私小説〟である。客が笑う。中村が平賀が、前夜と同じ場所で記憶通りのリアクションを演じる。

●N・S・Pデータ　今回のツアーは4月13日にスタート、6月25日の東京厚生年金ホールで38会場のコンサートを終えた。その間、多少の手直しはあるが、構成・喋る内容は変わらない。6人のバック・バンドの動きも同じだ。まるでVTRのように歌い、語り、笑うN・S・P。

会場を変えて演じられる鏡を見るようなコンサートだった。

天野「パタグはシラケてれ、3人は別。毎回少し違うんです」

中村「微妙な差だけど、それが面白いし、シラケたりしません」

平賀「昔は同じ話を5回も聞くと笑えなかったが、最近は新鮮です。ちょっとした雰囲気の差があるんです。毎日違うんですよ。プロになったのかな」

ラストの『さようなら』が終わり幕が降りた。アンコールの拍手が会場に響いた。N・S・Pがそれに応えた。拍手は静かに納まり〝儀式〟は終わった。

淡白な、ステージと客席の2時間の交歓だった。

翌日、次のコンサート地・山形に行くため郡山駅に向った。

天野は自分にいい聞かせるように語る。

「N・S・Pの音楽を聞いて、その3分なり5分なりの間『よかったな』と感じてもらえればいいんです。そしてぼくたちの音楽を知ってもらえれば……」

この飾らないことばが、マイナーにありながらしぶとく生きるN・S・Pの本音なのだ。

列車がすべり込んできた。駅への途中、N・S・Pを見つけた2人の女の子が彼らを見送ったすべてだ。

「信じられない。ワッ、N・S・Pに会えたなんて。私たち昨夜のコンサートにも行ったの！」

東北の女の子らしく、紅いホッペをより赤く染めて感激する2人。

だがこの2人も、やがてN・S・Pの〝青春〟を卒業して女性になっていく。

彼女らにとってN・S・Pは通過駅にすぎないのだ。

N・S・Pはいつまで青春を歌い続けるのだろう。

遠去かるN・S・Pを乗せた列車を運ぶレールのように、涯なく続くのだろうか。それとも彼らはいつの日か途中下車を試みるのだろうか。

N・S・Pのドキュメント・フィルムを制作する、電通の阪井光二氏の証言。

「シングル・ヒットがないのはもう一つパワー不足のため。中心になる大学生パワーを取り込む力が谷村新司にあっても、天野滋にはないというところが、メジャーとマイナーの差でしょう」

6月26日から7年目に突入したN・S・Pの明日は——。